

メンデルスゾーンの世界

協奏的変奏曲

メンデルスゾーンの3歳下の弟パウルは、アマチュアながらもチェロの名手だった。本曲は1829年に作曲され、パウルに捧げられた。流麗なアンダンテ・コン・モートの主題に続いて、8つの変奏、そしてコーダで曲を閉じる。変奏曲といっても、技巧を誇るものではなく、むしろピアノのほうが雄弁に展開するが、チェロの深い音色を活かして朗々とロマン的な旋律を歌い継いでいくところに、弟パウルへの愛情が感じられる。

チェロ・ソナタ 第1番

本曲もやはり弟パウルのために書かれた作品で、1838年の作曲。全3楽章からなり、古典派の書法に則っているが、情熱的な旋律はメンデルスゾーンならではの。第1楽章は、暖かい情感のこもった第一主題と、青年らしい翳りのある第二主題からなるソナタ形式。第2楽章は三部形式のアンダンテ。愁いを帯びた曲調だが、中間部では夢見るような旋律があふれ出す。第3楽章は変則的なソナタ形式。気品のある主題旋律が伸びやかに歌い、次第に気分を高揚させ、最後は静かに曲を終える。

無言歌 op.62-1

「無言歌」とは、「言葉のない歌」の意で、メンデルスゾーンの姉ファニーが考案したと言われている。メンデルスゾーンの《無言歌集》は、全8巻(各6曲)からなり、ピアノの性格小品集の傑作に数えられている。本曲は第5巻の第1曲で、1844年の作。作曲家自身が付けた標題ではないが、《5月のそよ風》と称されているように、少し物憂げな春を想わせる。

無言歌 op.109

メンデルスゾーン最後の「無言歌」で、作曲は1845年頃。メンデルスゾーンの死後に発見され、1868年に出版。ピアノ独奏ではなく、チェロとピアノのための作品で、当時は珍しかった女性のチェロ奏者リザ・クリスティアーナに捧げられている。三部形式で、メンデルスゾーンらしい優美な旋律が印象的。中間部は短調に転じ、情熱の炎が揺らめくが、最後は再び優しい表情に戻ってそっと曲を閉じる。

チェロ・ソナタ 第2番

メンデルスゾーンの短い生涯(享年38)では晩年と言える1843年(34歳)の作。この年は自ら奔走してライプツヒ音楽院を設立するなど、充実した時期でもあった。本曲は、弟パウルや親友のチェロ奏者アルフレード・カルロ・ピアッティの助言を受けて書かれた。4楽章構成で、ソナタ形式の第1楽章は、晴れやかな旋律が自由を謳歌するように歌う。第2楽章は、おどけたような微妙な表情を見せる。第3楽章は、まるで「無言歌」のようなピアノの長い前奏に続いてチェロが登場し、深い情緒を込めた旋律を奏でる。ロンド形式の終楽章は、生き生きとした速いパッセージの応酬で最後を飾る。